

## サンタ・マリーア・デル・ポーポロ聖堂キージ家礼拝堂クーポラの解釈について

— 惑星、天使、光の作用に注目して —

せき だいすけ

関 大輔 (大阪大学)

### 発表要旨

11  
時  
20  
分  
—  
12  
時  
—

松ヶ崎・東キャンパス内

60周年記念館

1F記念ホール

本発表はローマのサンタ・マリーア・デル・ポーポロ聖堂キージ家礼拝堂クーポラ(1516)を取り上げる。そこでは金メッキのストゥッコがグリッドを成し、ラファエッロ(1483-1520)の下絵に基づく9枚のモザイクパネルが嵌め込まれている。円頂部にはプットーを伴う神が描かれた円形のパネルが配され、その周囲に8つの天球(7つの惑星天と恒星天)と天使が描かれた方形パネルが並ぶ。異教に由来する占星術的モチーフである惑星とキリスト教の天使が同一画面に描かれるという奇妙なイメージに対して先行研究は専ら、施主であるアゴスティーノ・キージ(1466-1520)の占星術に傾倒した態度に着目してきたが、最大の特徴である天使の存在については等閑視されている。キージ家礼拝堂について詳細な研究を残したジョン・シアマンも同様である。彼は天球からプラトンの『ティマイオス』の影響を指摘し、このクーポラを「魂の王国」と主張する。この見解はキージ家の墓所として計画された礼拝堂の機能と照らし合わせると説得的なものであるが、やはり天使の存在に対する回答にはなっていない。

そこでまず惑星と天使と一緒に描かれる理由について考察する。16世紀初頭においてそれを許す思想といえばマルシリオ・フィチーノ(1433-99)のそれを除いてない。彼によれば占星術はキリスト教と矛盾するものではなく、天上の力を地上に招き降ろす媒介者たる惑星は神の意思を地上に伝える天使と比肩しうるものである。礼拝堂の計画が始まった当時(1507)、フィチーノは既に没していたものの、彼の思想の真髄を知るとフィチーノ自身が評する神学者ベニーニョ(1445-1520)がアゴスティーノの占星術師として抱えられていたことから、彼の助言のもと、惑星と天使のモザイクが考案されたのだと考えられる。

次いでフィチーノに由来するクーポラの企図する機能について考える。ラファエッロがここで既に時代遅れであったモザイクを用いているという事実に注目したい。実現しなかったものの、アゴスティーノはドラムにも穹隅にもモザイク装飾を施すつもりだったことがわかっている。彼らはモザイク、ひいてはその主たる効果たる光に並々ならぬこだわりを持っていたのだ。実際、この礼拝堂は同じ聖堂内の他の礼拝堂と比べると一際光に満ち溢れている。フィチーノ由来の惑星天使と光が導くのはまたフィチーノの思想である。『愛について』などで開陳されるように、神から発せられる光は天使の階段を経て地上に降り注ぎ、その光を受けた魂は天使の階段を経て神へと接近する。いわば神の光を受けて魂は昇天するのである。アゴスティーノとラファエッロが存命中に考案された礼拝堂の装飾、《ヨナ》と《エリヤ》が「死に対する勝利」を暗示するイメージであることを踏まえると、クーポラもまた「死に対する勝利」を謳うイメージであると言えるのである。